

CKJSだより

第73号

校長 松平 昭二

shoji_matsudaira@hotmail.co.jp

「やさしさを」育む

現代の若者を、「やさしさの世代」とも称しています。といっても、必ずしもほめているわけではありません。むしろ、そこにはマイナスのイメージが込められています。

そのイメージとは、「過度の同調主義」と言い換えてもよいかと思えます。自己主張せず、他人と決して張りあうことをしない。もちろん、他人との同調、協調は社会生活を送る上で必要であり望ましいことですが、行き過ぎると困りものになります。主体性を失い、人の言いなりになってしまいます。まして、世の中の変化が激しくなってくると、その変化に押し流され、自分を見失ってしまうことにもなりかねません。

そんな「やさしさ」が行きすぎ、過剰になると、社会問題ともなってきます。例えば、電車の中で目の前にお年寄りが立っていても、若者は席を譲ろうともしません。「やさしさ」の故からです。相手を年寄り扱いしないことが、「やさしさ」なのです。「席を譲ってほしい」と申し出たとき、席を空ければいいと考えるわけです。

つまり、今日の若者の「やさしさ」とは、他人の心の中に入り込まないこと、心配をかけないことにあります。席を譲ってくれとも言わないのに「席をどうぞ」と譲るのは、相手の心をかき乱し余計なおせっかいになります。黙っていることこそ、やさしいわけです。

少なくとも、私が育ったころの「やさしさ」とは、他人の心を慮り、気遣って、その人の気持ちになることでした。今の若者の「余計なおせっかい」こそが、かつてのやさしさだったわけです。

こんな「やさしさ」をめぐる価値観の逆転もあってか、「やさしさ」を正面から取り上げる論調は少なくなっているようです。「生きる力」を育むためには、「自らを律しつつ、他人と協調し、他人を思いやる心や感動する心」を育むことが大切です。「他人との協調性や思いやる心、感動する心」とは、かつての私どもの「やさしさ」そのものだと思います。その背景には、「頻発するいじめや子どもの自殺等の教育問題を克服するには、あらためて人間らしい心の回復こそが出発点だ」とする考えが込められています。

自分自身で考え、自分のことは自分でやろうと頑張ることを土台にして、お互いもてる力を出し合って切磋琢磨していく中に、友だちを思いやり、助け合い、お互いを高める本物の「やさしさ」が育っていくものだと考えています。「やさしさ」が、人と人をつなぐ架け橋として働くことこそ、最も大事な実践課題だと受け止めています。



新年あけましておめでとうございます。セントラルケンタッキー日本人補習校の教育活動が気持ちも新たに始まりました。今年も教職員一同、一丸となって教育活動に邁進していきます。これまで以上に、ご支援とご協力をよろしくお願い申し上げます。